実験的二次創作 ISーインフィニット・ストラトスー 人外を見よ(仮題)

並中半平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実験的二次創作　ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　人外を見よ（仮題）

【Ｎコード】

Ｎ２５１１ＢＡ

【作者名】

並中半平

【あらすじ】

ＩＳの物語に加えられた一人の男、指宿暦。

生物科学に精通し、自らの肉体さえ改造して最強へと至った指宿はＩＳ学園の教師として赴任する。

そんな彼と他の人たちとで織りなす物語。

コンセプトはオリ主以外の視点でのストーリー

指宿暦という人外（前書き）

オリジナルそっちのけで二次創作を執筆開始です。
こちらはほとんど試行錯誤の繰り返しなのでバシバシと意見感想を頂きたいです。
こういうところはこうした方がいいとか、このキャラの発言が変だとか、すごく助かります。
それおキャラ崩壊などもあるでしょうが、何卒ご了承下さい。

指宿暦という人外

俺こと、織斑一夏が指宿暦さんと出会ったのがいつのことだったのか正確には覚えていない。
というか、曖昧にも覚えていなかったりする。
気が付いたら俺の前に立っていた。超えたいと思える憧れの人として。
父のようで、兄のようで、頼れる存在であった暦さんは俺から見て最強の存在だった。
千冬姉が人類最強だとしたら、暦さんは人外最強もしくは人類最悪と言ったところだろうか。
生身の肉体で千冬姉の操る暮桜を圧倒するとかマジでありえない。
あれはバケモノと言ってもいいと思う。
水の上を歩いたり、空中を駆け抜けたり、瞬間移動したり、分身の術を使ったり、最早人間技じゃあない。千冬姉だって無理だろう。
あんなものを見せられたらどんな人でも唖然とする。絶望なんてその後だ。
むしろ絶望しない人の方が多いのかもしれない。
あれはああいう存在だ。そう割り切れてしまうほど、圧倒的な強さを暦さんは持っていた。
しかもそれは武に関してだけではない。
暦さんが壁にぶつかることなど彼を知ってる人は想像つかないけれど（のらりくらりとすり抜けそう）、ぶつかったとしても彼は折れない心を持っている。
揺るがない意思。とでも言えればいいんだけど、暦さんの場合は揺らぐまでもない世界と言ったところだろう。
暦さんにとって世界は些細なものなのである。
世界を超越した強さ。それが指宿暦の強さなのである。
強いな、と思う。本当に。

敵わない、とも思う。
圧倒的に差があるからこそ、胸を借りるつもりで向かって行ける。
だから、

「暦さん。行かせて貰います」

俺は専用機である白式に身を包み、雪片弐型を構えた。
目の前にはよれよれのシャツとズボンを身に纏った暦さんが、自然体で（ポケットに手を突っ込んで）立っている。
靴も（多分）ただのスニーカーだが、俺の攻撃は悉くそれに封じられてきた。
攻撃は受けていないためエネルギー残量はまだまだ満タンに近い状態だ。
だが、一時間も戦っているのだから体力がもう持たない。
全力を振り絞っても次の攻撃がラストだろう。

「うおおおぉおおおぉおお！！」

今出せる最大出力で暦さんへと肉迫し、雪片弐型を振り下ろす。相手が生身であることを気にも止めない、愚直で純粋な面。
暦さんが避けず、反撃もしないことを前提においた、戦闘中ではありえない一撃。
これは訓練だから。
俺の最大限を暦さんに見てもらおう。
刹那。
雪片弐型と暦さんがぶつかり、アリーナに土煙が待った。

＊

土煙のその奥に私は目を凝らしたり、はしない。結果は見ずとも分

かる。
一夏の攻撃がアレに届く訳がないのだ。
アレは私たちとは根本から違う。競うと思う時点で間違ってるのだ。
逸脱した天災たる束でさえ到達しえなかった高みに、アレは立っている。平然と。
一夏ならバケモノと表現するだろうが、アレと相対すればそんな言葉さえ生温いことが分かる。
とはいえ、今回は訓練。名目上では模擬戦となっているが、アレと戦闘をしようものなら地球上の全ＩＳを用いたところで戦闘とは呼べない代物になる。
もはや蹂躙だ。
暦さんのことだ。全力を出さずに蹂躙するだろう。
ほら、今だって晴れてきた土煙の中で、一夏の一撃を片足だけで止めた暦さんがいる。

「・・・アレは本当に人間なんですか？」

対戦相手の能力の確認という名目で私の隣にいたオルコットが驚きの声を上げた。
当然の反応だろう。
私も私とて雪片の全力の一撃を片手で止められた過去がなければ同じように思っていたはずだ。

「さあな」

人間であっても、人外であっても指宿暦は、私たち織斑姉弟にとって恩人であることには変わりまい。気まぐれにせよ、両親が蒸発した私たちを助けてくれたことには変わりないのだから。

「いやはや、驚いたよ。最近のＩＳは兵器として随分と変化を遂げ

たようだね。全くもって残念極まりないよ」

何時の間に。まるで始めからいたかのような自然さで暦さんはそこに立っていた。

＊

「一つ、宜しいでしょうか？」

わたくしは生身でＩＳと戦っていた指宿先生の言葉が信じられなくて思わずそう言っていた。

わたくしたちのようなＩＳ操縦者は国の多大な戦力となれる。今までのありとあらゆる兵器をも凌駕するＩＳという兵器を操れるエリートだから。

だから、ＩＳが兵器として進化するのを嘆くこの男の神経がわたくしには分からなかった。

「構わないよ。ぼくが正直に答える保証はないけれど、聞きたいことがあるならぼくがこたえてあげよう」

「では、遠慮なく。あなたはＩＳが兵器として進化するのは残念だと仰いましたが、どういう意図があってのことでしょうか？」

「一つ、宜しいでしょうかという問いに答えた時点でその一つが終わっているところだけど、答えてあげよう。折角の教え子からの質問だからね」

第一印象は最悪ですわ。そもそも男であるといだけでも度がたいのに、回りくどい飄々とした物言い。

はっきり言ってわたくしは好きになれそうになさそうですわ。

「そもそもＩＳは宇宙進出を目的として開発したものだ。それなのに戦闘的性能だけを追求されていたら残念に思わないかい？」

負け惜しみに決まってますわ。

自分は男でＩＳを操縦できないから、操縦できて戦力として有用な女性が羨ましいに決まってる。だから、本来の目的を重視することでそこから目を逸らしてるに決まってる。

「そう押し付けがましい考え方はするもんじゃあないよ、お嬢ちゃん」

っ、心を読まれ――

「心を読んだ訳じゃあないから安心してくれていいよ」

「なっ」

「思考を読んだだけだよ、お嬢ちゃん。こんなことは訓練さえすれば誰だって出来ることだから、驚かなくたって構わないんだよ」

「オルコット。気にするだけ無駄だ。それはそういう存在だと諦めた方がいい」

織斑先生はそう言うが気にしてしまう。わたくしの目の前にいるのは一体何なのでしょうか。

正直、怖い。

「それで、明日の決闘のためのデータ収集はきちんと出来たか」

そうだ。今回のこれはわたくしが織斑一夏さんのＩＳの性能を知るための模擬戦。
わたくしのブルー・ティアーズは世界的に見ても有名な機体。調べれば簡単に公的な情報は手に入る。故に対策を立てやすい。
それでは決闘に不公平が生じてしまうという理由で今回の模擬戦が行われた。
尤も、織斑一夏さんと自身の専用機とで初期化と最適化を行う為という名目もあったが。
これである程度は条件が平等になった。わたくしの訓練時間には織斑一夏さんの訓練時間は到底及びようがないが、それははじめの段階で分かっていたはず。
さて、織斑一夏さん。わたくしに対してどのように戦うのでしょう。楽しみですわ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2511ba/

実験的二次創作 ISーインフィニット・ストラトスー 人外を見よ(仮題)

2012年1月6日13時52分発行